

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The Imagination and the Sense of History in The Scarlet Letter

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1987-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鴨川, 卓博, Kamogawa, Takahiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2206

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



Hawthorne の想像力と歴史感覚

—*The Scarlet Letter* を拠所にして—*

鴨川卓博

Hawthorne が、アメリカの、主としてニュー・イングランドの、歴史或いは過去に対して、特別な関心を抱いており、それを彼の作品で扱ったことは衆知のことである。その動機についても、その扱い方についても、また、作品中に示された歴史観についても、既に多くの言及・研究がなされてきた。⁽¹⁾また、Hawthorne の作品のジャンルについても、歴史小説、ロマンス、シンボル/アレゴリー等の立場が、それぞれの主張を展開してきた。小論では、出来るだけ議論の重複を避けて、*The Scarlet Letter* (以後『緋文字』)を取り上げて、過去ないし歴史が、実際の作品の中で、どのように扱われており、それが、どのように機能しているかを検証し、それによって Hawthorne の文学的想像力と歴史感覚との問題に迫ってみることにする。

『緋文字』についての研究やエッセーの中で、暗黙のうちに提起されている問題に、この小説は誰の物語か、そこで扱われるテーマは何か、というのがある。そして、当然、多くの場合、罪の女 Hester Prynne の贖いの物語であると答えられ、それに、臆病(cowardice)のために偽善(hypocrisy)と高慢(pride)の罪を犯した Arthur Dimmesdale の、悔悟と救済の物語が加えられる。この立場は、それ自体、間違いいではない。だが、何故それが1640年代

* 小論は、日本アメリカ文学会第25回全国大会(札幌市、北星学園大学、1986年10月11日)でのシンポジウム、「作家の想像力と歴史感覚」における口頭による発題を、全面的に書き改めたものである。故新田弘昌教授はこれ聞いて下さり、婦神後御高評下さった。本論を、追悼の気持ちを込めて、新田先生に捧げる。

を背景にしているのか、時代とテーマとの関係はどうなっているのか、という点には必ずしも十分な注意が払われているとは限らない。『緋文字』を上述のようなテーマを扱ったシンボリックな物語と解する限り、これがこの時代でなければならぬ必然性は無いように思えるのだ。

では、作者は17世紀中葉(1642-49)⁽²⁾のボストンを、単に空想的な作り話(18世紀風のロマンス)⁽³⁾の背景として、「今を去る200年前」流の物語に利用しようとしたのであろうか。彼が主張したいモラルなり、思想なりを表現するのに、彼の時代(19世紀中葉)では差し障りがあるので、17世紀を背景に選んだのであろうか。それとも、シンボリックな物語にするのに、過去の話とした方が都合が良かったのであろうか。

『緋文字』は、17世紀中葉の、マサチューセッツ湾植民地のピューリタン社会の物語である。当時の、この社会における宗教的、政治・社会的状況が、緋色の文字“A”と共に、この小説の枠を決定する重要な構造原理であり、それに対する、19世紀の「作者」/語り手の判断、評価が、作品のトーンを作り出すのである。それは、植民以来進行する宗教と社会の墮落と退行の始まりと原因を、19世紀の視角から、17世紀の植民地の状況に見たものなのだ。Feidelsonの言うように『緋文字』の諸問題と Hester, Dimmesdale, Chillingworth, その他の人物達は、「その時代によって形を与えられ、[その時代の]意味を形に表した」⁽⁴⁾ものである。彼等の問題は、この社会の歴史的展開と共に生じ、変化し、そして消え失せるか、或は後の世代に遺される。それらは、小説の書かれた19世紀中葉に至るまでのニュー・イングランドの精神風土と深く関わることになるのである。「罪の結果の物語」⁽⁵⁾は、マサチューセッツ植民地のピューリタニズムが、植民以来、旧弊と異端を廃し、夾雑物を取り除いて、「純化」しようとして、形式的、抽象的で、冷酷、狭量、峻烈なものになって行く歴史的過程の一コマなのである。社会の秩序(law)と人間存在の基本の諸問題(性と愛(love))はその典型)の相克に関して、有効な解決策を持たなかった宗教社会が、政治的なものに変質し、「不純な」

(adulterated)なものに墮落していく物語なのだ。

構造的に見て、Hester が服の胸に着け、Dimmesdale の胸に焼き付く“A”の文字は、19世紀の視角から見た、ピューリタン 社会の 退廃 (depravity) とその宗教の不純化(adulteration)の表象なのである。群衆の面前で、曝され、顕わされることによって、この印は、単に個人的な不行跡を表す印ではなく、社会的犯罪 (crime)を罰する社会それ自体の姿のエムブレムともなる。罪を恐れ、印を着けることを要求した、植民地社会とその宗教は、Hester に対する罰を、我が身に引き比べて、罪を自覚するよすがとすると共に、社会の権威 (或は権力) を保持し、強化する手段としても、利用するのである。(6) こうして、紛れもなく、社会の退廃と宗教の墮落が進行する。

このことは小説の構造に明瞭に表れている。プロットの最初と最後は、共に群衆に対する公示 (展示) のシーンであり、そこでは人物達が全員登場し、群衆に取り巻かれている。物語は、罰としての罪の公示で始まり、隠した罪の露見と死で終る。Hester を処罰することは宗教(church)の行為であると同時に植民地社会(state)の行為でもある。勿論、ピューリタンの理想は政教一致の体制 (theocracy)であった故、彼女の行為は、当然宗教の関与すべき重大な罪である。だが、ボストンはもとより、近在の住民を集めて、3時間処刑台の上で曝し、生涯、衣服の胸に“A”の文字を着けることを命ずる、その処罰は、極めて形式的、政治的なもので、罪とその報いを公のものとするためのものであった。本来、姦通は社会の道德律を犯す行為ではあるが、神の命に違背する、神と個人との関係における、罪 (sin) である。それ故、この種の罪に対する罰は、神 (その仲介者としての教会一長老と会衆一) に告白し、その温情に縋るか、又は告白を拒否して、追放されるかであった。(7) 処刑台に曝し、ずっと恥辱の印を着けさせるということは、神の名によるべき処罰を、民衆の名で科すことで、罰を世俗的なものとする事なのだ。この意味で、Hester の処罰を「見物」しに集まる群衆は、決して単なる傍観者ではなく、姿形と声は多様であっても、作品を通して彼女と絶えず接触す

るキャラクターなのである。Hawthorne がヒントを得たと思われる、1694年に制定された、姦通を処罰する為の法律の規定も、Hester が受ける罰も、「いつも見えるように」しておく⁽⁸⁾ のが狙いであって、罪を犯した者に、その罪の重さを知らせ、悔い改めさせる為ではなく、Chillingworth が言うように、「罪を犯す者に対して生きた教え」(p. 171)となるように、印を着けて、社会の面前で公示し、他の者と区別・隔離する為であった。これによって、罪人(sinner)と神の間の罰が、犯罪者(culprit)と社会の間の罰へと変質し、宗教的には「墮落した、不純な」ものとなった。作中には姦通の罪を悔い改めるシーンはない。又、『緋文字』では、教会の内部が舞台になることはなく、告白もすべて公共の広場で行われる。

これらのシーンにおける、群衆とピューリタン社会の指導者達の姿、及び、その歴史的意味に関しての語り手のコメントは、ピューリタニズムの純化・抽象化による実体の喪失と墮落が、この小説の主題的問題であることを示している。この物語は、その墮落の一つの姿なのである。最後のシーンでのDimmesdaleの死と、最終章における語り手による暗い結末の要約は、墮落し、形骸化したピューリタニズムの姿と、その中における民衆の信仰喪失を示唆している。

これを図式的に言えば、Hester はピューリタニズムの枠を越えた異端の具現である。罰を受けた彼女は、“Another View of Hester” その他の章で言及されているように、形骸化してゆくピューリタニズムの宿敵となる。しかし、ピューリタン社会にとって、クエーカー教徒や反律法主義者(antinomian, 例えば, Ann Hutchinson)のように、彼女を追放することは出来ない。彼女の場合、初めから教義の上で異端であったわけではない。硬直化し、形式化するピューリタニズムの枠組みでは解決できない人間の情(=愛: それは、時として、unharnessed passion となる)の側面を代表しているのだ。この様な彼女を罰し、異端に追いやることで、ピューリタニズムはその偏狭と無能を自ら認めることになる。姦通の共犯 Dimmesdale は、職業

柄、共犯としてピューリタニズムを越えるものを受け入れつつも、それとピューリタニズムの共存を図ろうとする。だが、その困難に打ち拉がれ、更に強力なカルヴィン主義的決定論と制度化したピューリタニズムに押し潰される。迷い悩んだ後、再びピューリタニズムの世界に戻り、胸に印を現して、滅びる。コキューたる Chillingworth は、ピューリタニズムを越えよう、新しい世界観を創ろう、とする Hester と Dimmesdale に、原理主義的カルヴィニズムをもって迫り、彼らの試みを挫折させようとする。彼が、身体的に奇形の老人であり、旧世界の学識を備えていることは、彼のドグマが「不純」で歪んだものであることを示す。更に、彼がサタンまたはその手先であることは、本来ピューリタンの科学者であった彼が、錬金術に長じ、更にインディアンの呪術にも知識があるという、邪教的要素から明らかである。彼がカルヴィン主義的主張を振りかざすのは、悪魔の手先としての彼の役割を示すものである。Pearl はこの様な関係の中であって、ピューリタニズムを越えるもの（情愛）、越えようとする願望（異端、即ち、抽象化していない実体）の申し子（結実）であり、従って、貴重な珠（pearl）なのであるが、この社会では受容されない。彼女が「人間の女」になり得るのは、Dimmesdale が自らの「罪」（ピューリタニズムを越える考えを抱いていたこと）を告白し、その敗北を認め、滅びる時である。彼女が、自らの世界をこの墮落したピューリタンの社会である、と受け入れた時、そして社会の墮落に対する抵抗ないし警告の表象としての彼女の役割が終結した時、初めて、人間の子としての人生—非ピューリタンの人生—を生きることになるのだ。但し、それは旧世界—墮落していても硬直化、形骸化していない、より人間的な世界—においてである。

この図式において最も重要なのは、指導者を含めた、「公明正大なマサチューセッツ植民地」(p. 164) 社会—中でも、神政政治、と言うより形式化したデモクラシーに奉仕する宗教—選挙祝賀の説教がその見事な現れ—である。それは、旧世界から「不純な」要素を持って移住した民衆を、峻厳で陰鬱な、

冷酷で硬直化したものへと「純化」(19世紀的視点からすれば、実は、「不純化・墮落」)させようとしているのだ。民衆は全体としては温かい心を持っているが、頑なで迷信深く、“The Market-Place”や“The New England Holiday”に見られる如く、決して纏まることはなく、理性の力でも、信仰の強さでも、指導者達には及ばず、自分達の気付かぬ中に、強力な社会の枠組みの中に組み込まれ、多くの場合、その「不純な」信仰心と迷信の力によって、馴化されてゆくのである。その結果出来上がる「ピューリタン社会」は、当初セオクラット達が考えたように一枚岩の純粋なものではなく、偏狭、不寛容で、世俗化した権力が宗教の衣を被った墮落した(adulterated)ものである。それは、表面上は純粋であるが、実体のない抽象的なものとなるのだ。

冒頭の Hester 処罰のシーンで、「作者」/語り手が、アイロニカルなトーンで、「犯罪と死」の不可避性と、それに対する現実的対処に言及するが、これは極めて注意すべきことである。ここに集まった民衆は、「樂園」の汚濁に驚きもせず、その喪失を嘆きもしない。彼らは、畏怖の念に打たれてはいるが、皆、人間の実態と理想境の不可能なことを承知した上で、現実的に対処しているのである。処刑台上の Hester を見つめる群衆は、そこに立つべき自らを見つめているのである。彼女の受ける罰が、追放でもなく、鞭打ちでもなく、舞台上で人目に曝されることであり、常に緋文字を着けることであるのはこの意味で重要である。これによって、彼女は常に人—社会—から見つめられる記号・表象となるのだ。Hester を罰するのは、法の執行官(magistrate)ではなく、自分の罪に怯えている群衆が、彼女—即ち、自分自身—を見つめて科すのである。民衆は、「身代りの山羊、自分達に似たもの」として、「彼らの生きる世界の表象として」⁽⁹⁾ Hester を非難し、罰するのだ。彼らは、罪人に、神を恐れ、神に帰依し、神に助けを求めることを説かず、ただ罰を科し、罪を悔い、共犯者の名を言うことを求める。これがピューリタニズムの教義に深く関わっている一種の宗教行事であることは、Feidelson の指摘

するところであるが、一方、この行為は、宗教儀式を模した非宗教的行為でもある。これは姦通の宗教的本質を無視し、罰を社会的、形式的なものに変質するものなのだ。勿論、Hester も Dimmesdale もこのために苦しむ。Hester は表面従順で奉仕的に。しかし、内面では反抗的、異端的に。Dimmesdale は罪の重さと言うよりは、自分の罪が群衆の面前で明らかにされるという罰の可能性に怯えるあまり告白できぬ。臆病と偽善の罪を恐れ、苦しむ。

語り手が作中で繰り返し述べているように、この時期は、植民第一世代から次の世代へ権威が移ろうとしている時代で、ピューリタン社会はようやく安定に向い、制度と権力が確立されつつあったが、インディアンの襲撃、邪教や異端の侵入、住民の道徳的不完全さなど、危機が無い訳ではなかった。華やかなイングランドの生活や、風俗習慣が完全には捨てられておらず、植民地の住民の多くは、「堂々とした、壮麗な、愉快な」(p. 316)生活を記憶している世代であった。民衆は、「旧イギリスで生まれ育った」エリザベス時代の粗野さと荒っぽさ(p. 161)を残していた。後の時代で重視される「才能」「知性」よりは「年齢」「長く試練を経た剛直」「堅実な智慧と悲痛な色を帯びた経験」——口で言えば、「真面目な重々しさ」(p. 323)の時代で、住民達は、なお、理想化(つまり、抽象化)された世界ではなく、実体を持った世界に居た。彼らは、指導的な立場の者を除いては、⁽¹⁰⁾ 次や次の次の世代と比べると、ピューリタンの陰鬱さ、偏狭で無慈悲な、快樂を罪惡視した考え方、厳しい生活様式等を身に付けてはいなかった。換言すると、この時代は、「過去」が影を濃く落とし、「輝かしい」「未来」はまだ定かでない、実在と抽象の混乱した、「現在」のみの時代であった。従って、この連中に「立派な、」道徳や価値観を植えつけるために、節儉令を含めた、厳しく、冷酷な社会制度を打ち建てることと、洗練された理論を構築して、未来を説くことが必要であった。Hester の罰はこの目的で科せられ、Dimmesdale の「不名誉な」死もこの目的に叶うものであった。⁽¹¹⁾ しかし、このことは、実在の代

わりに、偏狭な秩序一様式的洗練と抽象を選択することである。その結果、かつての活力は失われ、制度は形式化し、教義は硬直化し、信仰は形骸化する。語り手の居る19世紀から見れば、この選択がその後の歴史を方向づけ、社会の退行、理想境の喪失を決定的にするのである。

ピューリタン達が空想した理想境は、既に設立の当初から、死と犯罪（植民者達は移住直後に墓と牢獄の用地を確保しなければならなかった）によって、失われている。だからこそ、総督を始め、植民地の「徳」と「権威」を代表する者も、「不純な」信仰を持ち、自ら罪を防ぐ「徳」を持たない民衆も、理想境に罪が存在することで、「震え戦き」(p. 160)、自分達の「身代り」、「自分に似たもの」として、Hester Prynne を罰することが必要なのだ。植民地社会は、一種の悪魔払いとして、「傲然たる微笑をたたえ、びくともしないという眼差」(p. 163)をした罪人に、処刑台の上で辱めを与え、胸に印（作品中でカインの額の印に比較されていることから、これが象徴的な意味を持つことは明らかで、後に、Hester の安全を保障するものとなる）をつけて、「楽園」から追放する。これは、その意味で、極めてシンボリックな儀式なのである。つまり、この処罰は Swann が言うように、⁽¹²⁾ 社会が、印を着けた Hester と印そのものである Pearl に、罪の象徴となって、自分達が脆く、罪深いものであることを、示すことを求めると同時に、象徴として眺められることによって、二人を社会から疎外する、一種の排除の儀式なのである。しかし、社会は Hester に罰を科すことによって、Hester のみならず自らをも人間の本性から締め出し、⁽¹³⁾ 神の道から自分を遮断した。その結果、Hester は自由を獲得し、社会は硬直化し、墮落する。

こうして、「ピューリタンの裁判所が与えたいつまでも絶えず活きている宣告」(p. 191)のため、Hester は社会から、隔離される。しかし、ピューリタン社会が Hester に科す罰—恥辱の印による隔離—は彼女を孤立させるが、結果的には彼女を自由にする。⁽¹⁴⁾ 彼女は相変わらず、表面は静かに社会の規

則に従っていたが、心の内では、むしろ罰を受けたがために、よりラディカルになり、「悪魔とひとしく危険な」(p. 259)当時ヨーロッパに普及しつつあった自由思想(libertarianism)、「思索の自由を自分のものにしていく」(do.)。彼女の考えはピューリタン社会のものとは大きく違い、「世間の法則はもう彼女の心の法則ではなかった」(do.)。Hester は、決して、ピューリタン流の罪を受け入れない。彼女はその意味で異端, antinomian⁽¹⁵⁾ である。だが、彼女もピューリタン社会の罰を拒絶することはできない。罰が彼女の異端的思考の枠組みを規定しているのです、もしこの罰を取り去れば、彼女の自由思想、彼女の個人主義は成立しなくなるのだ。彼女の個性、「正体」(identity) は、罪の意識によってではなく、緋文字(Pearlはその生きた印)によって規定され、実体を付与されているのである。この限りにおいて、Hester は完全にピューリタンの思考の枠から自由ではない。この枠から出れば、彼女の「正体」が失われる。従って、彼女は普段は、「罪人達の霊的交わり」、「悪の親交」を意識し、自分の罪深さを信じる。⁽¹⁶⁾ 彼女の世界が、「熱意と感情から思索に変わる」(p. 259)のは、ピューリタニズムが「純化」して、抽象化してゆくのと軌を一にしたものなのだ。ここに彼女の限界がある。彼女が後に、一旦、ヨーロッパに渡って後、再びボストンに戻って来るのも、この為である。「罪を犯した場所」と言うのは、社会の側(つまり語り手が便宜上採る視角)から見たもので、Hester の立場から言えば、彼女の個性・人格を実体化せしめる条件、即ち、「罰」による枠組みを与えられた場所と言うことなのである。⁽¹⁷⁾ 7章の“The Governor’s Hall”での出来事がこれを良く示している。彼女は Pearl の養育を認められる代わりに、自分を制御することを余儀無くされ、以後、「決して世間と戦うことなく、何にも不平を言わないで、その最悪の待遇にも甘んじる」(p. 257)ことになる。

「彼女と人類全体を結びつけるつながりは...すべてたち切られてしまっていた」(p. 255) Hester は、胸につけた緋文字によって、即ち、自らの孤立を際立たせることによって、彼女を取り巻く社会と接触を保つ。飾りたて

る緋文字が孤立のシンボルであると同時に、元の社会への出入りを保証するパスポートでもあるのだ。もっとも、社会の限られた部分に、限られた役割を持ってではあったが。このことは、当時の社会が、公式には受け入れない彼女の思想と価値観を、緋文字によって、自らの「身代り、似たもの」として、承認するということを意味し、拒否・疎外することによって、承認するという、奇妙な逆説となる。彼女は、社会の外れではあっても、抹殺されることなく、存続が許され、遂には限定して受容されるに至る。これは単に彼女の外面的行為について言えるばかりではなく、彼女の思想、価値観についてもそうなので、これこそ Hester に残された唯一の社会との交渉の方法であった。

こうして、Hester に対する社会の評価は、だんだん、彼女に好意的に変化する。胸に付けた緋文字は、初め、「恥辱の印」(p. 171)として、「群衆の想像のなかに... 恐怖を」生んだ(*do.*)が、そのうち「烈しい嘲笑」(p. 190)を誘うものになり、やがて、「高位の人も」「公なことにたずさわらない私的生活をしている個人もみな」、Hester の「過失を全て許してしまって」(p. 258)、この印は「一種の一般的尊敬」(p. 256)を招く、「尼僧の胸にある十字架」のように危険のなかで彼女の安全を保証する、「善行の印」(*do.*)となり、遂に“A”の文字は Adultery ではなく、Able 或いは Angel すら表すとも見られるようになる。

Dimmesdale は姦淫のみならず、思考の枠においても Hester の共犯である。ピューリタン第二世代として、⁽¹⁸⁾ 抽象的な知性の人でありながら、一方では、激しい情熱の人でもある。情熱は、彼に罪を犯させたが、彼を実体のない幻のような、抽象的な非実在ではなく、異端的ではあるが実体的存在たらしめる。彼の問題は、自分に内在する、「異端」と「正統」の両方に責められて、その差異と正邪、人間的な問題に対する有能・無能の別、を十分に認識するが故に、その選択をする勇氣を持ち得ないことである。彼は、Hester

の主張する個人の価値に理解を示す。最初のシーンで、Hester に共犯者の名を言うよう求めた時、罪人の秘密を強制的に告白させることは悪いこと⁽¹⁹⁾だと言い、総督の屋敷で Hester の唱える Pearl の意味と役割を理解し、彼女の言い分を支持する。後に森の中で認める、犯した罪に対する彼の考えと共に、これは異端的である。しかし、一方で、彼は Wilson 師に言われるままに、Hester にピューリタニズムの求めるところを説く。彼は、Hester との愛は「過ち」で、そのなかに「何か神聖な所」(p. 286) が有りはするが、決して神の認めるところではない、と考える。この様な状態では悔悟に効果は無い。これは、ピューリタン社会が彼に求め、彼自ら受け入れた、「正統」の倫理観と思考の枠から、彼が抜け出せないでいる故である。そして「穢れた魂が他人の魂を浄めることはできない」(p. 283) のではないかと疑う。語り手の言うごとく、「社会の法規や、主義や、その偏見にすら拘束されていた」(p. 290) 彼は、Hester と同じ罰を受けるべきだと信じる。社会の宗教的、法律上の規定もそれを彼に求める。それで、彼は説教壇の上で、繰り返し己の罪深さを告白し、神と社会の赦しを請う。善行を重ね、苦行を為すことによって、悔悟の実を挙げようとする。しかし、こうした密かな懺悔や処罰はピューリタン社会の慣習(規定)に合わないのであるから、当然、効き目は無い。彼はこれを偽善と臆病の所為にするが、彼の正統神学が、プライベートに、神の前で悔い改めることを認めていない以上、当然の結果である。悔悟が実を挙げ、罪の贖いを得るには、人気の絶えた深夜の処刑台や、異教的な森の中ではなく、神と人間の両方が見ることが出来るように、白昼、群衆の前で、社会の規定に基いた刑罰として、告白しなければならない。だが、「社会組織の先頭に立って」(p. 290) 社会とその道徳を支えている、規範としての牧師の立場からは、そうすることが許されない。彼が倒れれば社会は崩壊する。この相克の中で、彼は出口の無い閉塞状態にあった。

Dimmesdale にとって、唯一の選択は、異端へのコミットメントで、それによって、「自らの胸の牢獄から逃げ出す」(p. 292) ことである。この社会

を離れ、「一般に受け入れられている法則の範囲を越えて」(p. 290)、自分の正統思考の枠の外に出ることである。森で Hester に再会し、この社会から逃げるよう誘われて、彼はピューリタン社会の外の可能性を自分の選択とする。そして、一時的にせよ、Hester と一緒に犯した罪を認め、Pearl を認知する。たとえ絶望からであっても、厳しい正統教義を社会全体に押し付けてきた牧師が、その教義の埒外に飛び出す決心をするのである。この時彼が「希望と喜悦」を顔に浮かべていた、と語り手は伝えるが、これは、冷たい抽象(正統)ではなく、温かい実在(異端)を選び、人類の「罪」の歴史の中に、自分を位置付けた喜びである。Dimmesdale は、森からの帰途、世界が今までとは違って見え、自分のみならず、出会う人全ての罪深い側面が見えてきて、神を冒瀆する言葉を掛けたいという衝動にかられる。彼は自分がすっかり変わったことに気付く。「別の男が森から帰って来たのだ。一層思慮ある人となって」(p. 310)。しかし、旧世界に逃げる決心は、確かに、彼に別の世界の可能性を見せはするが、森での経験は、あくまで、所属する社会の外での、借り物の異端的思考によるもので、正統説を完全に捨てて、異端を全面的に受け入れたのではなかった。彼には今一つ、ピューリタンの牧師として、「神と人類社会との関係」(p. 332)を考え直す仕事が残っていた。靈感(森で Hester に会った影響とすれば、異端的靈感と言うことになる)を得て書き、神の力に動かされて説く、選挙祝賀の説教がそれである。ここに至って初めて、真に、社会とその歴史の中における、自分の正体と位置を確認する準備が整うのである。知性の人 Dimmesdale は、設立以来のピューリタン社会の、過去、現在、そして未来への、退行の歴史の流れの中に自分を位置付けるのである。この説教は、決して宗教的なものではなく、政治的演説ないし式辞で、アメリカの進歩に対する賛歌⁽²⁰⁾である。語り手はこの時の Dimmesdale の役割をユダヤの予言者に喩えた上で、「荒野のなかに開拓しつつある...ニュー・イングランド」(do.)の「高く栄えある運命を予言する」(pp. 332-33)と極端に持ち上げる。この「語り」はその後のピ

ューリタニズムの姿を知っている、19世紀のパーспекティブからのもので、アイロニカルである。

社会を「偉大な審判の日」(p. 250)の証人として、Dimmesdale が処刑台の上で己の罪を告白するのは、一旦は捨て去る決心をしたピューリタン社会（つまり、正統）の罰を、自ら求めて受けることである。これは、彼にとっては、自らの過去を、社会に向かって、公然と承認して、自己を確立することになり、彼の死は「勝ち誇った」(p. 339)ものとなる。但し、それは、墮落退行するピューリタンの社会が輝かしい未来に向かって進んでいる、と勘違いした上でのことであって、実際は、Dimmesdale の死によって、異端を抱えこむことを拒絶することになり、一層その退行は決定的になるのである。

社会は、先に述べたように、Hester のうわべの従順と善行を受けて、緋文字の意味を変えて受け取るようになるが、一方で、Dimmesdale が説教壇上でなす、「偽善的な」告白を聞いて、「一斉にその席から衝動によって立ち上がり、...説教壇から彼を引きずりおろして、引き裂く」(p. 242)代わりに、「彼等はそれをすっかり聞いていた。そしてなおさら彼を尊敬するようになるばかりであった」(*do.*)。これは Dimmesdale が悩み苦しんだように、彼の自己偽瞞であったが、同時に、社会が先入主に囚われて、真の姿を見抜けないことを示している。このように、硬直化した社会は、最後の場面で、牧師が己の胸の「赤い烙印」(p. 338)を暴露したとき、衝撃の余り、「畏怖と驚愕の、奇妙な低い声」(p. 339)しか発することができない。社会が、Dimmesdale の告白と死の意味について、考えを纏める（即ち、この小説の「読者」のように、歴史のパーспекティブを持つ）には幾日かが必要なのであった。

このように、Hester と Dimmesdale の物語を、17世紀中葉のピューリタン社会の問題として、把えるということは、この小説を、Henderson の言う

全体論的 (holist)⁽²¹⁾ 歴史観で、一時期の社会の政治的・宗教的（それに狭い意味で文化的）状況を描いた、歴史小説として読む、ということである。⁽²²⁾ 社会は、少なくともこの小説のプロットの上では、プロビデンスに従って、贖いに向かって進むものとも、完成(perfection)に向かって前進するものとも見えない。この小説は、独善的な社会が、他人と己に対して向ける不寛容（さ）の為、人間の弱さ、脆さに対する同情心を失い、人類の罪深い過去を、自分のものとして受け入れることができない様子を描いたものである。この社会は、冒頭の Hester の処罰の場面で、判決に不服のある婦人達の会話と、Chillingworth に Hester のことを説明する男の言葉で示されるように、粗野で荒っぽい、洗練の足りない社会なのである。厳しく、容赦の無いことが、他人の罪を自分の罪として、その重さと痛みを感じる共感を拒絶する。当然、社会はすぐには Hester の罪を自分の経験とすることが出来ない。公に告白することで明らかにする Dimmesdale の過去—歴史—を受け入れることが出来ない。歴史を受け入れるということは、歴史を経験する、つまり、自分を過去の出来事や思想のなかに置いて、その罪や苦しみ（或いは喜び）を味わった後、再び現在に戻ることである。⁽²³⁾ 硬化した、独善的な、過去を自分達と無縁なもの（つまり、自分達が過去の歴史—罪や汚れ—を断ち切った）と考える、人間（社会）には出来ないことである。

人間は己の過去を受け入れる（確認する）ことによって正体 (identity) を得るのであって、⁽²⁴⁾ Hester は、ピューリタン社会が彼女に罰を科し、曝し台に立たせた時、幼時から醜い学者の妻になる迄の、自分の一生を、走馬灯のように、目まぐるしく憶い起こす。この時、彼女は己の過去を回復し、自己の正体を確認し、自分とピューリタン社会との関係を正確に認識する。この結果、彼女には社会における自分の私的、公的位置が明瞭になり、これ以後は社会の制度を表面上甘んじて受け入れながらも、確立した自己を失うことはない。つまり、緋文字によって、社会が彼女に付与した身元証明を身に付けながらもそれによって縛られることはないのである。緋文字を私的な身元

証明として、密かに社会とは違った思索の自由を持つことになるのだ。以後、彼女と社会との関係は、彼女の側が変わるのではなく、社会の側の変化によって維持される。もっとも、こうした Hester の状況は、彼女を非現実的な (unreal) なものにする。公の姿と、私的な状態との間に分裂があるからである。(25)

森の中で Hester が自分の胸に付けていた緋文字を捨てた時、彼女は若返って見える。これは過去（の罪の印）を捨てた途端、それ以前の過去が戻ったことを意味する。そして、Hester に緋文字を再び付けることを Pearl が要求するのは、もし Hester が首尾よく過去を捨ててしまえば、過去の印そのものである Pearl は、その存在を否定されることになるからである。勿論 Hester にはそれは出来ない。過去を受け取ることを拒否しようとする、過去によってその試みが破られるのである。Pearl の存在が確実なものになるのは、彼女の存在に責任のある者達—社会も含めて—が過去を承認した時である。物語の結末で、語り手は Hester がヨーロッパから帰ってきて、再び緋文字を胸に付けたことを伝えるが、これも罪を犯した場所で贖罪をする為—道徳的に読むと当然そうなるが—というよりは、過去を拒否することが自らを否定することになるからである。一度、ヨーロッパ（旧い過去）に帰った後で、再びアメリカ（その後の過去）に戻ることによって初めて、現在を受け入れることが出来るということである。(26)

これに反して、Dimmesdale は森の中で自己を発見するのが不十分である。故に、改めて処刑台でこれを為し、自己処罰（過去の受容）をすることが必要になる。彼にとって不幸なのは、彼の世界が、「独善的」で、精神の偏狭と權威主義をその病根として持っている、硬化した正統ピューリタン社会であったことである。Hester が公然を受け入れて、密かな自己の世界を確保するのに対して、Dimmesdale の方は、密かな自己の世界で苦悩して、公然の世界へ逃れるのである。しかし、彼が自己確立をして帰る公然の世界—ピューリタン社会—は、彼の過去と罪を自分のものとすることができない。

Strauch 流に言えば、Hester は過去を認めた上で、未来（思索の自由は彼女より後の時代）に逃れ、Dimmesdale は現在に行き詰って、過去（カトリック的苦行と彼の時代よりは古いピューリタニズム）へと逃げたいということになる。⁽²⁷⁾ 故に、彼には死しか残されていない。

『緋文字』をこのような歴史小説として読む際、無視することが出来ない要素は、語り手の視点と、その機能であろう。詳細に論じる余裕は無いが、作者がこの小説に長い序—“The Custom-House”—を付けて、物語の典拠（勿論フィクションであるが）⁽²⁸⁾ を示し、如何にも本当の話であるかのよう装うのも、作中で語り手が、明らかに2世紀後の視点から、しばしば植民間もないボストンの社会について解説する⁽²⁹⁾ のも、この物語を「自分達の」祖先とその社会の物語とする為である。これは、Feidelson の言う如く、⁽³⁰⁾ 時間を遡って生きることであって、観念的な19世紀的歴史観で（自分達とは無関係な、単なる過去の現象として）過去を見るのではなく、自分の時代の思考や観念からその時代に遡及して行くという視角で振り返る—と言うより自分達の考え、精神の淵源に立ち帰るとも言える—行為なのだ。実在した人物や出来事を⁽³¹⁾ 大枠において史実通り（ただし、恣意的な選択による）に配し、Hester⁽³²⁾ と Dimmesdale の反社会的な罪（勿論反宗教的な罪でもある）とそれに対する社会の反応の物語を創り上げて、ピューリタンの時代とその時作られた、社会の規律や価値観を、自分達の過去（起源）として、確認しようとするのである。こうすることが、「歴史的関連」をつける、つまり、「ある過去の時代を、我々から飛び去りつつあるこの『現在』に結びつけようとする企て」⁽³³⁾ を実行することに他ならないのだ。

『緋文字』の中で憶い出され、指摘される過去は、単に、ニュー・イングランドの過去だけではない。Hester が曝し台上で憶い起こすのは、旧イングランドやヨーロッパ大陸の町での生活であるし、ピューリタンの群衆が身につけているのは、旧イングランド、それもエリザベス女王時代やジェーム

スー世時代の、習慣や生活態度である。これは、アメリカが旧世界の墮落した歴史から切り離された、無垢な世界であるとする考え⁽³⁴⁾とは違う。旧世界から連続した人間の歴史として、過去を受け入れるのである。ピューリタンの世界を描いて、その独善的な社会が過去を承認しないという過ちを犯すことを指摘したものである。

Dimmesdale の胸に現れた印について、語り手は、これに関する諸説(牧師の胸に緋文字を見た者、見なかった者の考え)を紹介した後で、Dimmesdale の胸には何もなかった、「彼はその死に方によって寓話を作った...人間は皆ひとしく罪人であるという偉大なたましい教訓を強く注ぎ込もうとした」云々、という19世紀的解釈を伝える。これは、先に紹介された諸説のうちで、プロットから見て、最も蓋然性が低いと思われる説に基いている。しかし、19世紀的視角からは、この蓋然性の一番低い説こそ、語られた事件がピューリタン社会に対して持った意味を正しく解釈していると思われる。時代の経過が歴史を生きるものではなく、眺める対象とし、その姿を抽象的なモラルと見せるのである。ここでの多枝選択(これも Matthiessen のように技法と考えるのは適当でない)による曖昧の生む芸術的効果も、一面から見れば、幻覚や迷いも含めた17世紀の人間の認識⁽³⁵⁾と、一旦その時代を精神的に経験した、19世紀の視点と理解の、両方をそれぞれ受け入れて、表現したものと考えられる。また、「『真実なれ！真実なれ！真実なれ！』」(p. 341)という語り手の「憐れな牧師の惨めな経験」(do.)の要約的解釈は、直接目に見えない罪過と不面目の烙印に対して、戦かなかった社会に対する身をもって為した牧師の「教訓」の、アイロニカルな、そして流練された、19世紀的解釈である。真実であらねばならなかったのは、牧師ではなく、形骸化し「不純に」なったピューリタニズムではなかったのか。Hawthorne にとって、歴史は過去を観念的に合理化(辻褃があうように説明)することではなく、今、ここで、過去と対面(直面)することであり、その対面で得られた認識を持って、今を生きることであった。⁽³⁶⁾

注

(1) 数多くあるが、小論を書くのに参考にしたものに止める。

(イ) Hawthorne と歴史に関するもの：

John E. Becker, *Hawthorne's Historical Allegory: An Examination of the American Conscience* (Port Washington: Kennikat Press, 1971); Michael Davitt Bell, *Hawthorne and the Historical Romance of New England* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1971); E. Miller Budick, "The World as Specter: Hawthorne's Historical Art." *PMLA* 101 (1986), 218-32; Patricia Ann Carlson, "National Typology and Hawthorne's Historical Allegory." *CEA Critic* 37 (1974), 1-13; Elizabeth L. Chandler, "A Study of the Sources of the Tales and Romances Written by Nathaniel Hawthorne before 1853." *Smith College Studies in Modern Languages* 7 (1926, rpt. 1976), 64pp.; Robert Clark, *History, Ideology & Myth in American Fiction, 1823-52* (London: Macmillan, 1984); Robert H. Fossum, *Hawthorne's Inviolable Circle: the Problem of Time* (Deland, Fla.: Everett/Edwards, 1972); Harry B. Henderson, III, *Versions of the Past: The Historical Imagination in American Fiction* (New York: Oxford Univ. Press, 1974); Johannes Kjørven, "Hawthorne and the Significance of History." *Americana-Norvegica: Norwegian Contributions to American Studies*, 1 (1966), 110-60; Christoph Lohmann, "The Burden of the Past in Hawthorne's American Romances." *South Atlantic Quarterly* 66 (1967), 92-104; Roy Harvey Pearce, "Hawthorne and the Sense of the Past or, the Immortality of Major Molineux." *ELH* 21 (1954), 327-349; _____, "Romance and the Study of History." *Hawthorne Centenary Essays* (ed. by Pearce; Columbus, Ohio: Ohio State Univ. Press, 1964), pp. 221-44; Carl F. Strauch, "The Problem of Time and the Romantic Mode in Hawthorne, Melville, and Emerson." *ESQ* 35 (1964), 50-60; D. Nathan Sumner, "The Function of Historical Sources on Hawthorne, Melville, and R. P. Warren." *Research Studies* 40 (1972), 103-114; Charles Swann, "Hawthorne: History versus Romance." *Journal of American Studies* 7 (1973), 153-70; James F. Walter, "The Metaphysical Vision of History in Hawthorne's Fiction." *Nathaniel Hawthorne Journal* 1976 (Englewood, Col.: Information Handling Services, 1978), pp. 276-85; Alan S. Wheelock, "The Burden of the Past." *Essex Institute Historical Collection* 110 (1974), 86-110; Paula K. White, "Puritan Theories of History in Hawthorne's Fiction." *Canadian Review of American Studies* 9 (1978), 135-53.

(ロ) *The Scarlet Letter* と歴史に関するもの：

Michael Davitt Bell, "The Young Minister and the Puritan Fathers: A Note on History in 'The Scarlet Letter'." *Nathaniel Hawthorne Journal* 1971 (ed. by C. E. Frazer Clark, Jr.; Washington, D. C.: Microcard Editions, 1971), pp. 159-68; Michael J. Colacurcio, "'The Woman's Own Choice': Sex, Metaphor, and the Puritan 'Sources' of *The Scarlet Letter*." *New Essays*

on *The Scarlet Letter* (ed. by Colacurcio; Cambridge, Cambridge Univ. Press, 1985), pp. 101-35; Edward H. Davidson, "The Question of History in *The Scarlet Letter*." *ESQ* 25 (1961), 2-3; Charles Feidelson, Jr., "The Scarlet Letter." *Hawthorne Centenary Essays* pp. 31-72; Frederick Newberry, "A Red-Hot A and a Lusting Divine: Sources for *The Scarlet Letter*." *NEQ* 60 (1987), 145-64; _____, "Tradition and Disinheritance in *The Scarlet Letter*." *ESQ* 23 (1979) 1-26; Charles Ryskamp, "The New England Sources of *The Scarlet Letter*." *AL* 31 (1959), 257-72; John C. Stubbs, "Hawthorne's *The Scarlet Letter*: the Theory of the Romance and the Use of the New England Situation." *PMLA* 83 (1968), 1439-47.

- (2) Charles Ryskamp は『緋文字』中の歴史的、地理的問題の詳細を明らかにした。Cf. Ryskamp, *op. cit.*
- (3) 1840年代ではロマンスと自称する作品は、歴史小説に多く、空想的な作り話を意味なくなっていたらしい。John C. Stubbs, *op. cit.* によると、1839-47年の間に出版された、タイトルに Romance という語を使った 111 の作品の内、58 がアメリカ史に関わりがあることを、そのタイトルで示しているという。
- (4) Charles Feidelson, Jr., *op. cit.*, p. 31.
- (5) F. O. Matthiessen, *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (New York: Oxford Univ. Press, 1941), p. 343.
- (6) 数多くの歴史的ソース・スタディーは、この時代が、情愛の秩序の面で乱れており、高位の者(例えば、Richard Bellingham 総督、Steven Batcheller 牧師)も、一般の者(例えば、1643年に処刑された、James Britton と Mary Latham)もこの罪を犯していたことを明らかにした。cf. Fredrick Newberry, "A Red-Hot A and a Lusting Divine."
- (7) Edward H. Davidson が Cotton Mather の Diaries の記録として伝えるところによると、姦通の罪を犯した婦人は、教会の会衆の前に呼び出されて、公に罪を非難された。被告はそれを認めて、長老の温情に縋るか、それを拒否して、教会から追放されるかのいずれかであったという。(Davidson, *op. cit.* p. 3.) 又、Hawthorne が『緋文字』の序 "The Custom-House" 『税関』で言及している Joseph B. Felt, *Annals of Salem from Its First Settlement* (Salem, 1827; reprinted in Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter: An Authoritative Text, Background and Sources [&] Criticism* (Norton Critical Edition; 2d ed. Ed. by Sculley Bradley, Richmond Croom Beatty, E. Hudson Long [, &] Seymour Gross; New York: W. W. Norton, 1978), p. 196) の記録によると、Plymouth 植民地で、牧師達の要望に応じて、1694年5月5日、[[当節]流行の不正行為]を取り締まる法律が制定された。姦通(Adultery)と重婚(Polygamy)を処罰するためのもので、前者の罰は罪人達を「首に縄を巻いて、1時間絞首台の上に座らせ、40回以下、強く鞭打ち、以後、生涯、衣服と違った色の布を切り抜いた2インチの長さの大文字Aを、起きているときはいつも、見えるように、衣服の腕又は背に縫い付けさせる」というもので、後者は指定された例外を除き、死刑であった。注目すべきことは、この時これらの「不正行為」が「流行して」("prevailing")いたと記されていることである。

- (8) Cf. 「お天道さまの 明るみに引き出される」 (“dragged out into the sunshine” p. 164. 小論で使用するテキストは Nathaniel Hawthorne, *Novels* (New York, The Library of America, 1983) で、以後、ページ数のみ示す。
- (9) Feidelson, *op. cit.*, p. 47.
- (10) とは言っても、彼等とてその影響は受けているのだが。(Cf. p. 188.)
- (11) もっとも、19世紀の語り手は、彼の死が意味するものを 社会の処罰とは言わないで、「寓話」化したものだ。と説明するのだが。
- (12) Charles Swann, *op. cit.*, p. 164.
- (13) Feidelson, *op. cit.*, p. 55.
- (14) “to set her free” cf. Feidelson, *op. cit.* p. 54.
- (15) 作品中、Hester が antinomian であると述べられることはないが、2度 Ann Hutchinson に対する言及があり、内1度は Hester が “a religious sect” の創立者として Mrs. Hutchinson に並んだであろうと述べられている。このことから、彼女の思想傾向が antinomian に近いと考えることが出来よう。Cf. Michael J. Colacurcio, “Footsteps of Ann Hutchinson: The Context of *The Scarlet Letter*.” ELH 39 (1972). Reprinted in Norton Critical Edition (2d. ed.), pp. 227-46.
- (16) Cf. Feidelson, *op. cit.*, pp. 57-58.
- (17) 自分の「犯した」罪とピューリタン社会が与えた罰についての Hester の思弁は明らかにニュー・イングランドの精神史、思想史の問題となるが、ここでは扱わない。ただ3人の人物達が示す思想的立場を簡単に図式的に示すに止どめる。Hester は現在よりずっと進んだ未来(19世紀のような modern といえる時代)を代表し、Chillingworth は未来を持たない過去を代表する。Dimmesdale は、過去を整理し、現在と結び合わせ、観念化することによって未来を切り拓く任務を帯びていた。しかし、現在に縛られ、かつ過去に脅かされ、未来が展望できない。最後に現在を捨てることによって、抽象的な未来に逃れる。
- (18) Cf. Michael Davitt Bell, *Nathaniel Hawthorne Journal* 1971, P. 161.
- (19) “wronging the very nature of woman to force her to lay open her heart’s secrets” p. 174.
- (20) Cf. Michael Davitt Bell, *Nathaniel Hawthorne Journal* 1971, p. 164.
- (21) Harry B. Henderson, III, *op. cit.*, p. 14.
- (22) Carl F. Strauch は American Romanticist の歴史観を「循環的」として捉えた上で、Hawthorne が循環する時代(epoch)と人間の個性(personality)との同一性を確立し、それを融合した、個性は時代である、と主張する。Cf. Strauch, *op. cit.*, p. 52.
- (23) Cf. Roy H. Pearce, *Hawthorne Centenary Essays*, p. 225.
- (24) Hawthorne は己の過去を承認することが、精神的危機を乗り切る上で極めて重要であると考えていた。“My Kinsman, Major Molineux” で Robin が町で途方に暮れ、精神的な危機に陥った時、田舎の生活や家庭を憶い起こす。これも全く同様の意味を持っており、Robin はこれで自己を確立するのである。
- (25) Cf. Swann, *op. cit.*, p. 166.
- (26) それに、Pearl が旧世界(過去)に帰って行くのも、回復を完成する為である。こう見ると、Hawthorne の歴史観は「循環的」とも言える。

- (27) Cf. Strauch, *op. cit.*, p. 52.
- (28) Jonathan Pue は実在した Salem 税関の検査官で、Felt の *Annals* にその死亡 (1760) の記録があるとのことである。Cf. Norton Critical Edition, p. 26.
- (29) 語り手は繰り返す、この時代の様子や考え方、価値観を、後の時代のものと比較する。ざっと見ただけでも、“The Market-Place”(pp. 160, 161), “Hester at Her Needle”(p. 188), “Pearl”(p. 196), “The Governor’s Hall”(p. 203), “The Elf-Child and the Minister”(p. 210), “The Minister’s Vigil”(p. 251), “Another View of Hester”(p. 259, *passim*), “New England Holiday”(pp. 316, 317) 等に見られる。
- (30) Feidelson, *op. cit.*, p. 32. Also cf. Roy H. Pearce, *Hawthorne Centenary Essays*, p. 224.
- (31) 背景になる出来事のうち、史実に合うのは Governor John Winthrop (1588-1649) の死だけとのことである。彼は 1649 年 3 月 26 日に死んでいる。Hawthorne はそれを物語に都合の良い 5 月に変更した。Cf. D. Nathan Sumner, *op. cit.*, p. 112.
- (32) Hester Prynne のソースや類似点はいくつか指摘されている。例えば、Charles Boewe & Murray G. Murphy, “Hester Prynne in History.” AL 32 (1960), 202-204 は Hester という名が、1688 年 Major William Hathorne が立ち会って、“fornication” のかどで、処罰された Hester Craford と同名であることを指摘した。なお他に前記 Newberry の研究を始め、Mukhtar Ali Isani, “Hawthorne and the Branding of William Prynne.” NEQ 45 (1972), 182-95; Alfred S. Reid, *The Yellow Ruff & The Scartlet Letter: A Source of Hawthorne’s Novel* (Gainsville: Univ. of Florida Press, 1955); Max L. Autrey, “A Source for Roger Chillingworth.” *American Transcendental Quarterly* 26, Supp. (1975), 24-26; Louis Owens, “Paulding’s ‘The Dumb Girl’, A Source of *The Scarlet Letter*.” *Nathaniel Hawthorne Journal* 1974 (Englewood, Col.: Microcard Editions, 1975), pp. 240-49. もある。
- (33) “the attempt to connect a by-gone time with the very Present that is flitting away from us”—“Preface” to *The House of the Seven Gables*, p. 351.
- (34) 例えば、Emerson や Whitman のような超絶主義者達のアメリカ観、或いは旧世界から脱出して、天意に導かれて、完全な理想郷の建設を目ざし、かつ可能と考えていた、ピューリタン達の考え。“New Adam and Eve” で新しく生まれた、過去の悪や罪を知らない、新しいアダムとイヴが、彼等の生まれ落ちた世界が既に墮落していることを知るの、この意味で示唆的である。
- (35) Pearce は『緋文字』に見られる象徴的モチーフ：森対村、人間対自然、白と黒、光と闇、現実と鏡に映ったイメージ等などは Hester, Dimmesdale など 17 世紀の人間が世界を見、その理解を創り上げる方法を示しているという。Cf. *Hawthorne Centenary Essays*, p. 236.
- (36) Cf. Pearce, *Hawthorne Centenary Essays*, p. 240.